

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 上島 淳史

本論文は、人々の分配行動における分配的正義の作用様態を一連の行動・認知実験から検討したものである。「いかに分けるか」に関するさまざまな葛藤は、コロナ禍での財源・医療資源の分配に典型的に現れているように、現代社会における最重要の関心事となっている。本論文は人々の分配選択について、規範的理論との関係を意識しながら、学際性をもつ先端的な実証知見を得ることを試みている。本論文は、5つの章から構成されている。

第1章は、規範的立場から考究されてきた分配の正義について、人々の行動選択を実証的に検討することの意義を論じている。Rawls (1971) が『正義論』第三部において当時の心理学研究の知見について詳細なレビューを行っているように、経験的研究は「社会的協働の公正な条項を明確に示す」(Rawls, 2001) 上で重要な役割を果たす。正義の構想が社会設計に資するためには、どのような正義の構想であれば広く人々に受容される可能性があるかという事実の問題(「である」)を、人間本性に関する経験的研究によって明らかにする必要がある。本論文は実験社会科学のアプローチを採用しながら、とくに、分配選択における「不平等回避 (inequity aversion)」の認知的基礎について実証的な検討を行う。

第2章は、人々が、格差そのものに注目する平等的配慮 (egalitarian concern) と、最不遇の立場を重視するマキシミンの配慮 (Maximin concern) をどのように弁別するのかについて検討する。両者は現実の社会場面で混同されがちだが、規範的には異なる分配価値を表現し、政治場面でも異なる結果をもたらす施策を導くことがある。本章では、モデルベースの2つの選択実験から、①人々の「不平等回避行動」はほとんどの場合にマキシミンの配慮によって説明されるが、②同一の分配問題を「平等選択 vs. 効率選択」とフレームする場合には、「マキシミン選択 vs. 効率選択」とフレームする場合に比べ、個々人のイデオロギー的な選択を強化しがちであることが示された。続く第3章では、第2章の知見を社会的な合意形成場面に拡張した。人々が分配問題を互いに議論する場合には、個人で熟慮する場合以上に、(平等的配慮と弁別された) マキシミンの配慮が選択場面で増大し、そうした態度変化は6ヶ月後の再調査においても保持されることが明らかになった。この結果は、熟議民主主義の理想を明確に支持している。第4章では、(平等的配慮に対する) マキシミンの配慮の優越性は、認知的に極めて素早く頑健に発動することを、高い時間分解能をもつ測定方法(マウストラッキング)を用いて実証した。第5章はこれらの実証的知見が規範的正義論、および現実社会における分配選択にどのような含意をもつか、考察を行っている。

本論文には、一般化可能性を含め知見の境界条件が必ずしも明確ではないという問題点も存在する。しかし得られた実証知見の精度、解析の緻密さ、論理構成など、論文全体の質は非常に高く、高い独創性と学術的価値が認められる。よって、審査委員会は本論文が博士(社会心理学)の学位に値するとの結論に達した。